

# 美術史研究者の考える美術資料の情報モデル —山口素絢の『百美人図』を基に—

Information Models for Fine Arts Based on Scholars' Experience  
- The Case of 'A Hundred Beauties' Drawn by YAMAGUCHI SOKEN -

家村 祐香\*、藤本 悠\*\*

## Resume:

美術資料に与えられる価値は、種々の研究者に依存している。一つの美術資料を観察する際、美術史研究者の脳裏では、研究者自身の経験の中で蓄積された、様々な情報の処理が行われている。その処理過程における膨大な情報を明確な方法によって整理することは、実際の資料に立ち会った研究者がどのような情報を関連付けて、その美術資料に価値を与えたのかを記録して残す上で重要である。そこで本研究では山口素絢の『百美人図』を用いて、美術史学の視点で絵画資料を観察し、情報モデルという厳密な文法を持った手法で一つの作品に関連付けられる情報の整理を試みた。本研究で取り上げた山口素絢は和美人画を得意とした江戸時代の円山派の画家で、『百美人図』は総勢 84 人の美人を描いた 2 巻構成の絵巻物である。この資料は、制作の 80 年ほど前に出版された版本を手本にしていたり、現代人では想像しにくい当時の風俗を反映していたり、たった一つの資料であっても膨大な情報が関連付けられている。これらを UML クラス図を用いて整理したところ、クラス間関連は非常に複雑であるが、クラスそのものは複雑ではなく本研究の方法が美術史情報を扱う上で有効な方法になり得ることが分かった。

## 1. はじめに

近年の情報技術の発達は、美術史学にとって大きな影響を与えつつある。特に、高精細なスキャナの登場や材質分析のための理化学機器は、保存科学の観点から見ると極めて重要である。しかし美術品は価値を有し、その価値は研究者によって与えられるものなので、物理的な情報だけではなく、時代や国に依存して大きく変化する研究者の考え方を保持する必要もある。そこで本研究では、山口素絢の『百美人図』を通して、情報モデルによって研究者の考え方を記述し、これを保存できないか検討する。

あったことが知られている [木村, 1975]。また、独特の美人画で知られる京都の画家、祇園井持の師が素絢であったとも伝えられる [木村, 1976]。

同門で、同じく応挙門人十哲の一人である源琦が唐美人画を得意としたのに対して、素絢は和美人画を得意とし、両者はしばしば比較して論じられる。源琦の美人は応挙の描く清純で静かな美人画を受け継ぐが、素絢はもっと濃艶で、より現実に接近した美人画を特徴とする。本研究で扱う『百美人図』も、素絢の得意とする美人尽くしの絵巻物である。

## 2. 山口素絢と画の特色

山口素絢 (1759~1818) は通称を武次郎、字を伯後あるいは伯陵、号は山斎、『平安人物志』(文化十年版)によると京都の祇園袋町に住んだとされる。筆を持ち始めた時期など詳しい経歴は研究段階であるが、円山応挙に師事し、その門人十哲の一人に数えられるほどの画家で

## 3. 百美人図の特徴と注目すべき視点

### 3.1 作者について

『百美人図』は、「陽」の巻と「陰」の巻の 2 巻からなり、各巻につき本紙 15 枚、両巻で計 30 枚にさまざまな女性風俗を描いた絵巻物である。軸箱には山口素絢筆による寛政十一年 (1799) の作品と書かれているものの、本紙い

\*いえむら ゆか (同志社大学大学院 文化情報学研究科)

\*\*ふじもと ゆう (日本学術振興会特別研究員 DC(同志社大学大学院文化情報学研究科))

ずれにも画家自身の落款・印章が見られないため、素絢の真作であるかどうかは今後慎重に検討する必要がある。ただ、素絢筆とするかの判断は別の機会を設けるとして、とりあえずここでは素絢筆として本資料を扱うこととする。

軸箱に書かれた制作年に従えば、素絢41歳、画家として成熟期に入り始めたと思われる頃の作品である。

### 3.2 特徴と構成



図1 暗示的に示された遊女の例

『百美人図』の「百」とは、「たくさん」や「～尽くし」といった意であり、必ずしも百人の美人のことを指すわけではない。本図で描かれる美人は、陽巻で41人、陰巻で43人、2巻で総勢84人にのぼる。

一見すると陽巻では遊女や遊郭に関係した職種の女性が中心、陰巻では主に各階層の女性の姿態が描かれている。ただし、例えば陽巻の本紙14枚目に登場する大原巫女は「歩き巫女」とも呼ばれ、島原や吉原のような幕府に認められた官許の遊郭以外の市井において、春をひさいだという遊女の一形態である。島原の遊女が中心の陽巻で、大原巫女のような当時の、いわゆる私娼が描かれるのはともかくとしても、一見すると遊女が描かれているように見られない陰巻で、同様に遊女を想起させる美人が暗示的に描かれているのは、大変面白い(図1)。

### 3.3 『百人女郎品定』との関連

西川祐信の『百人女郎品定』は京都の八文字

屋から享保八年(1723)に刊行された絵本で、上・下巻、それぞれ本紙25枚と20枚で構成される。明和八年(1771)には禁書目録に記載され、絶版となったが、宝暦年間には江戸で改刻本が出回り、鈴木春信ら当時の画家たちが『百人女郎品定』の図を手本にして自身の画に使用しているなど、高い人気を誇っていたことがうかがえる[倉員, 2003]。

上巻は各階層の女性、下巻は遊女やその周辺の美人が中心に描かれており、『百美人図』と類似する。実際、前述の大原巫女をはじめ、『百美人図』のほとんどの図が『百人女郎品定』の構図に倣っており、両絵本の関係は本研究において重要な考察点となっている(図2・図3)。



図2 『百人女郎品定』における大原巫女



図3 構図を倣ったと思われる『百人女郎品定』での2人の女性

## 4. 百美人図の情報モデル設計

### 4.1 情報モデル構築の意義

情報モデルを用いて研究者の考え方を整理することには三つの意義がある。

一つ目は、保存科学的な意義である。美術作

品に対する価値が、どのような情報と関連付けられて生まれるのかを明示的に記述できることである。美術作品に対する考え方をスキーマとして作品と一緒に記録することで、異なる時代や研究者の考え方を保存できる。

二つ目は、研究者の認識に忠実な分析が可能になるという点である。例えば、M.ウェーバーの理想型分析にヒントを得て考案された、藤本の「理想型モデル化分析法 (ITMA: Ideal Types Modeling and Analysis)」があり、この分析手法を用いることで、個々の資料の理念上の位置関係を明示的に示すことができる [藤本, 2009]。

最後は、意思伝達手段としての意義で、日本の美術史研究者がどのような視点で絵画を観察し、分析しているかを、海外の研究者に伝える場合に有効な手段となる。情報モデルは、厳密かつ単純な文法で記述する言語なので、日本の研究者の考え方を他の国の研究者に伝える上でも重要な方法となる。

#### 4.2 美術作品から読み取れる情報

美術史研究者が一つの美術作品からどのような情報を取り出すかを情報モデルで記述していくと、たった一つの作品を解釈するために非常に多岐にわたる情報を参照していることが分かる。特に、『百美人図』のように、その分野の研究者でなければ、一見して遊女かどうか分からないものを正確に見分けるためには、当時の風俗を描いた版本や絵画、文献資料を参照する必要がある。例えば、前述の「大原巫女」の場合、『百美人図』よりも80年ほど時代の上がる『百人女郎品定』に同じ構図の美人が登場し、さらにそこに「大原巫女」と添え書きがある。美術史研究者は、これを見ることで『百美人図』に描かれるその美人が大原巫女であると明確に理解する。また、画家の人物像を推測するためには、作者の出自を知ることも重要で、これを知るためには埋葬地となる寺などに関する情報も必要となる。

このように、美術作品から読み取れる情報は、対象資料だけでなく、様々な他の資料と組み合

わすことで初めて分かることも多く、これらの関連性は美術史学の視点からしか定義できない。

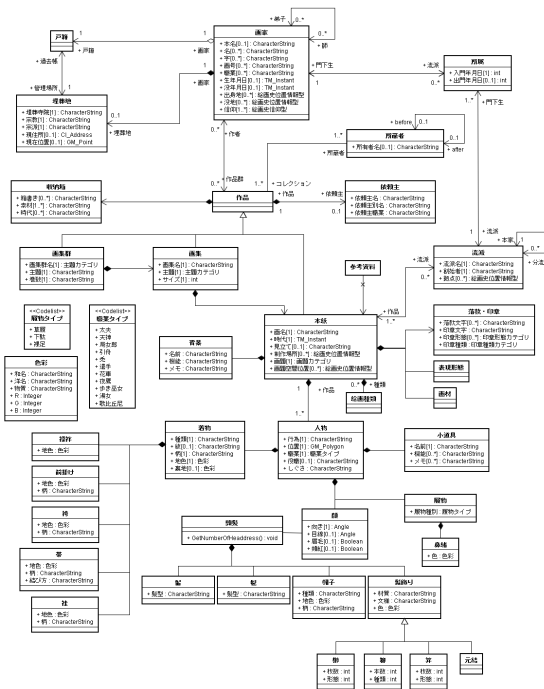


図 4 UML クラス図を用いた『百美人図』の情報モデル(Ver.0.1)

#### 4.3 情報モデルの設計方法

実際に、『百美人図』から読み取れる情報を情報モデルで記述したものが図4である。この情報モデルでは、オブジェクト指向の考え方を通して関連する情報を整理しており、UML クラス図(Unified Modeling Language Class Diagram)で記述している。この情報モデルでは、属性の型は国際的な業界標準、「地理情報標準(ISO 19100 シリーズ)」に準拠している(ISO/TC 211)。同標準には、時間(ISO 19108)や空間(ISO 19107)の型の定義や、これらの型を用いて情報モデルを設計するための方法、そして、設計した情報モデルを符号化するための規則を全て備えている。したがって、情報の整理の段階からデータベース化の段階に至る全ての工程は、同標準に準じた方法で対応することができるので、絵画情報システム開発を考えると、将来的に大きな意味を持つ。

## 5. おわりに

本研究を通しては、クラス間関連は非常に複雑である一方で、クラスそのものは複雑ではなくUMLクラス図によって美術史情報を整理する方法は有効であることが分かった。また、UMLクラス図を通して美術作品の情報を情報モデル化することで、他分野の研究者が直感的に相互の関係や、個々の情報の重要性を理解できることが分かった。これは、様々な分野の研究者が参加する学際的なプロジェクトや、国をまたいで行われる国際的なプロジェクトにおいて相互の認識を共有するための適した手法となるだろう。

しかし、本研究の試みはまだ始まったばかりで、『百美人図』の本紙30枚全てを詳細には観察できていないし、本稿で示した情報モデルはまだ完全とは言えない。解決すべき課題も多く、より本質的な問題と向き合う必要さえある。例えば、日本美術史では、用いる用語が非常に複雑で、研究者によって同じ用語であっても異なる意味であったり、反対に同じものを異なる言葉を用いていたりと、といった事がある。また、これらをデータベース化するためには、基幹システムやデータの実装方法を考える必要もある。オブジェクト指向GIS(OOGIS: Object Oriented GIS)は、一つの可能性として有力な候補であるが、実際に普及している汎用のOOGISは存在していないので、実用的なシステムを開発する必要もある。

本研究は、将来的なビジョンで見ると重要な意味を持っているが、美術史研究者に本研究の意義を伝えるためには、本質的に現在の美術史研究にどのように貢献できるか、より明確に伝える必要がある。

## 6. 参考文献

- [1] 倉員正江. (2003). 出版規制と草紙類の刊行をめぐって—八文字屋刊『百人女郎品定』の場合—. 国文学研究, 139, 30-40.
- [2] 木村重圭. (1976). 焔の系譜—祇園井特から上村松園まで—. 三彩, 352, 27-35.
- [3] 木村重圭. (1975). 山口素絢—唐美人図

屏風によせて—. 日本美術工芸, 436, 70-78.

- [4] ISO/TC 211. (n.d.). Retrieved 08 05, 2009, from ISO/TC 211 Geographic information/Geomatics: <http://www.isotc211.org/>
- [5] 藤本悠. (2009). 学際分野研究としての文化情報学研究(2). 文化情報学, 4 (1), 11-27.